

りんご病害

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	—	並	(1) 5月後半（落花20日後）の巡回調査では、発生が確認されなかった。（－） (2) 6月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生を助長する条件ではない。（±）
斑点落葉病	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、発生が確認されなかった。（－） (2) 6月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生を助長する条件ではない。（±）
うどんこ病	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、一部の園地で発生が確認された。（±） (2) 6月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生を助長する条件ではない。（±）

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 「ふじ」の落花期（北上市）は5月4日と、平年より11日早かった（平年5/15）ため、散布間隔が空く場合は追加散布を検討する。
- (2) 6月は褐斑病や斑点落葉病等の様々な病害の感染時期である。梅雨期は週間天気予報等を活用し、降雨前の予防散布に努める。
- (3) 耐性菌の発達を防ぐため、落花期散布以降は黒星病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用を避ける。

【腐らん病】

- (1) 一度処置を行った園地でも、再度園地をよく観察し、病患部の発見に努める。
- (2) 枝腐らんや胴腐らんの剪除、削り取りを徹底する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さず、集めて処分する。

【黒星病】

- (1) 園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉（図1～3）や発病果（図4）を摘み取り、土中へ埋没させる等して適正に処分する。特に、前年に発生がみられた園地では十分に注意する。
- (2) 苗木等の未結果樹での発生にも注意し、成木と同様に薬剤防除を徹底する。
- (3) 他病害との同時防除を兼ねて、本病に効果のある予防剤を定期的に散布する。
- (4) 散布ムラがないように十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。



図1 果叢葉の葉裏病斑



図2 葉表の初期病斑



図3 隆起した葉表の病斑



図4 果実病斑

【褐斑病】

- (1) 褐斑病の発生が見えた場合、トップジンM水和剤又はベンレート水和剤を特別散布する。
- (2) スピードスプレーヤの旋回場所や片側散布の場所などの散布むらが多発要因となる。
- (3) 早期発見のためには、主幹部近くの枝の込み合っている部位の果そう葉や新梢下位葉を観察する。園地の中でも葉液のかかりにくい場所を中心にできるだけ多くの樹で観察する。
- (4) 葉に褐色の病斑が観察された場合や黄変葉が坪状に観察された場合は、これらの葉やその周辺の葉を観察し、本病の特徴である分生子層（黒色虫糞状の粒々）の有無を確認する（図5参照）。



図5 褐斑病の初期病斑

【斑点落葉病】

- (1) 薬剤の到達しにくい樹上部の徒長枝から蔓延することが多いので、不要な徒長枝は早めに整理する。
- (2) 病原菌は高温多湿を好み、2～3日降雨が続くと発生が目立つようになる。週間天気予報等に注意し、予防散布に努める。
- (3) 本病は7月上旬の発生を抑えることで、夏季に多発する危険性を大幅に軽減することができる。例年7月に多発する園地では、6月下旬の定期散布に効果の高い薬剤（ナリアWDG）を散布する。

【黒点病】

- (1) 6月下旬頃まで感染が続くので、この時期の散布間隔が開き過ぎないように注意する。

【炭疽病】

- (1) 本病が例年多発する園地では、落花30日後までの定期散布剤にアントラコール顆粒水和剤を選択する。

【モニリア病】

- (1) 実ぐされ、株ぐされの発生が見られたら、翌年の伝染源となるので、摘み取って、園地内に残さないよう必ず処分する。

りんご虫害

1 予報（6月）の内容

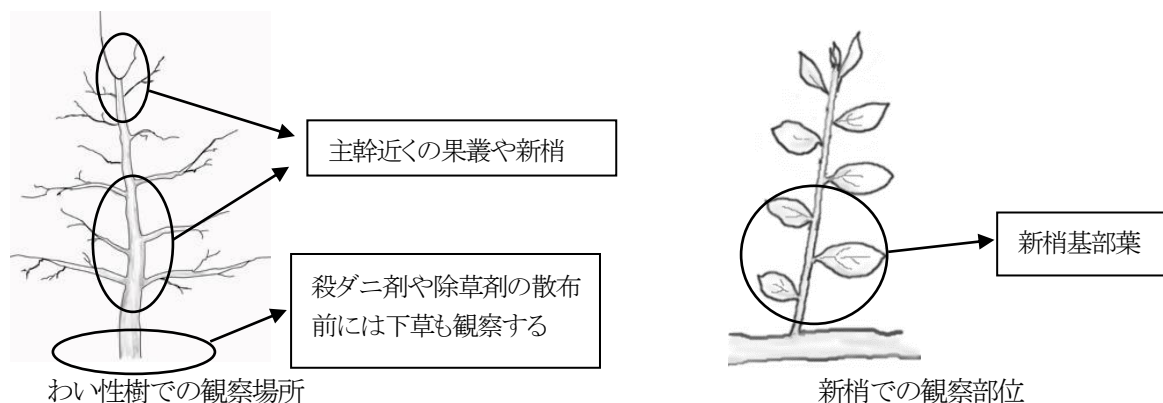
病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	—	並	(1) 5月後半の巡回調査での発生園地率は、平年よりやや低かった。(±) (2) 6月の気温はほぼ平年並の予報で、発生を助長する条件ではない。(±)
ナミハダニ	—	並 (県北部：多)	(1) 5月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 5月後半の県北部での発生園地率は、平年より高かった。(+) (3) 6月の気温はほぼ平年並の予報で、発生を助長する条件ではない。(±)
キンモンホソガ	第1世代羽化時期早	多	(1) 有効積算温度から推測される第1世代の羽化盛期は、平年より早い。 (2) 5月後半の巡回調査での発生園地率は、平年より高かった(+)
ギンモンハモグリガ	—	並 (平年少発生)	(1) 5月前半の巡回調査では、例年どおり発生は確認されなかった。(±)
シンクイムシ類	やや早	並	(1) フェロモントラップへの誘殺は、平年より早かった。 (2) 6月の気温はほぼ平年並の予報。 (3) 前年の被害果発生園地率は、平年並だった。(±)
果樹カメムシ類	—	やや少～並	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は、盛岡市では例年より少なく(-)、金ケ崎町では例年並であった。(±) (2) 6月の気温はほぼ平年並の予報であり、飛来を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハダニ類】

- (1) 普通樹では主幹・主枝の徒長枝の下位葉、わい性樹では主幹近くの新梢下位葉を良く観察し、ハダニの寄生葉率が30%に達したなら防除を実施する。



- (2) ひこばえや主幹・主枝から出ている不要な徒長枝は、薬剤の散布ムラの原因となりハダニの増殖源となるので、なるべく早く（6月前半まで）剪除する。また、薬剤の散布時には十分量を丁寧に散布する。
- (3) 薬剤の効果を高めるため、殺ダニ剤の散布7日前頃までには下草を処理しておく。
- (4) 薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は1シーズン1回使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを厳守する。

【キンモンホソガ】

- (1) 多発園（20果叢当たり5マイン以上の発生園）では、第1世代の羽化状況に応じて第2世代を対象とした防除を行う。前年多発園地では、本年も多発傾向にあるので、注意してマインを観察する。
- (2) ネオニコチノイド剤は羽化始期～羽化前期、IGR剤は羽化始期～羽化盛期に使用すると効果が高い。羽化始期は羽化盛期の5日前、羽化前期は羽化盛期の5日後が目安である。

表 キンモンホソガ第1世代羽化盛期の予測（5月29日現在）

地点名（標高）	羽化盛期 （予測）	ネオニコチノイド剤による 防除適期	羽化盛期 （平年値）
盛岡（155m）	6月11日	6月6日～6月16日	6月第5半旬
北上（61m）	6月3日	5月29日～6月8日	6月第3半旬

※ 平年値は、平成25年から令和4年までのフェロモントラップへの誘殺盛期の平均からみた羽化盛期

※ 羽化盛期は、当年の越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期（北上は4月第2半旬、盛岡は4月第4半旬）を起点とし算出（平成22年防除技術情報）

※ 5月28日まではアメダス現況値を、5月29日以降は平年値を利用した。

※ 観測地点の標高より100m増すごとに羽化盛期は3～4日遅れるので注意する

【ギンモンハモグリガ】

- (1) キンモンホソガとの同時防除が行われているので、一般に本種を対象とした防除は不要である。

【シンクイムシ類】

- (1) 交信攪乱剤設置園では、フェロモントラップへのモモシンクイガの誘殺が確認されたら、薬剤防除を行う。
- (2) スモモヒメシンクイのスモモ等での発生が増加する時期なので、その後のりんごへの飛来を防ぐため、スモモ等での防除に努めること。

【果樹カメムシ類】

- (1) カメムシ類の飛来は、園地周辺部の結果樹木（ヤマザクラ、キリ、クワ）や防風ネット等も同時に観察する。特に、例年被害の多い園地では、園地内をこまめに観察する。
- (2) 大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を行う。ただし、合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類の異常多発や薬剤抵抗性害虫の発現などが懸念されるので行わない。
- (3) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。